

# 防災・減災の輪

かがわ自主ぼう連絡協議会  
会報 第153号(2019.12.1)  
事務局 川西地区自主防災会

## 地域とつながり、子どもたちの防災意識を高める

～防災キャンプ（谷っ子と協働・地域防災プロジェクト）を通して～

観音寺市立一ノ谷小学校  
校長 横山 謙治

### 1 はじめに

東日本大震災発生から8年が経ちました。地震からの復興はだいぶ進みましたが、まだ災害の爪痕が残っている地域があります。また、その後も熊本地震、大阪府北部を震源とする地震、北海道胆振東部地震と相次いで大型地震が発生しました。また、最近では西日本豪雨をはじめとする数々の豪雨災害が全国で発生しています。

わたくしたち香川県においても、身近で心配される南海トラフ地震をはじめ、豪雨災害などに対する「防災」や「減災」を実行に移すには、災害を学び、事前の備えに最善を尽くすことが重要です。そこで、本地域では、万が一の場合に備えて、より安全な避難行動や救援活動の協力がとれるようにするとともに、災害への意識の向上を図ることを目的に、7年前より『一ノ谷防災キャンプ実行委員会』による防災キャンプ（「谷っ子と協働・地域防災プロジェクト」）を実施しております。

年々、活動や学習の内容は変わってきておりますが、防災キャンプを通して、子どもたちが地域のみなさんと協力しながら学び、防災や減災の意識を高めている姿は今も変わっておりません。それでは、これまでの取組についてご紹介させていただきます。

### 2 取組の具体

#### (1) 平成24～27年度の『防災キャンプ』

「プロジェクト実行委員会」が中心となって計画・運営をしていただいています。

夏休みの時期に、希望する親子が参加し、地域のみなさんと一緒に様々な防災訓練が行われてきました。

24年度には、「起震車による地震体験」や「防災講演会」のほか、「大釜による炊き出し体験」、「防災ワークショップ」の活動が行われました。そして、子どもたちは「防災ずきん作り」も体験しました。子どもたちにとっては、どれも貴重な体験となりました。

年度を重ねるごとに、活動の内容も少しずつ変えたり、新たな活動を加えたりしながら実施されてきました。



〈起震車による地震体験〉



〈大釜による炊き出し体験〉

25・26年度の防災キャンプには、160名ほどの子どもたちが、保護者とともに参加しました。ボランティアの方々を含めると、およそ300名が参加しての盛大な防災キャンプとなりました。1日目には、「段ボールハウス作り（芝生広場にもテントを設営）」や「大釜による炊き出し体験」、「ドラム缶風呂」、「手作りランプ作り」、「ナイトウォーキング」、「火おこし体験」などの活動を行いました。そして、2日目には地域防災訓練が実施されました。そこでは、丸亀市川西地区の自主防災会の方々の指導による防災訓練や、降雨体験なども行われました。

26年度の「段ボールハウス作り」では、2回目の参加となる子どもたちがリーダーとなって、様々な工夫をしながら段ボールハウス作りを行う姿が見られました。前年度に比べて、多くのグループで暑さ対策がとられていました。参加した子どもたちからは、「外から虫が入ってきて寝にくかったです。」や「夜に段ボールハウスから出て歩く時は、明かりがないところでは暗くて怖かったです。」、「震災にあった人たちは、このような生活を続けていることがどんなに大変がよく分かりました。」などの感想が聞かれました。



〈段ボールハウス作り〉

27年度には、新たな活動として、観音寺市水道局の方々による「造水車による水の浄化作業見学」や、観音寺第一高等学校天体観測部のみなさんの指導による「天体観測」、「暗闇迷路体験」そして「はしご車・救助袋による避難体験」が行われました。

また、これまでも行ってきた「ナイトウォーキング」には、真っ暗な中で迷路を歩く「暗闇迷路体験」が加わりました。

「天体観測」は、夜、辺りの様子が分からない時にも、北極星を目印に方位を知り、安全な行動に生かすことをめざして実施されました。あわせて、月や金星、木星を天体望遠鏡で見ることができると、参加者にとってはたいへんよい経験となりました。また、「暗闇迷路体験」は、暗闇の中でも、班のみんなで助け合いながら、落ち着いて手探りで進むことができることをめざして行われました。

さらに、6年生による「はしご車の体験」や、5年生による「救助袋による避難」では、参加した殆どの子どもたちが初めての体験だったようです。



〈造水車による水の浄化作業見学〉



〈天体観測〉

毎年実施される、これらの体験の積み重ねが、子どもたちにとっても、防災意識の向上に向けた大変よい取組になっていることを有難く思います。



## (2) 平成28～30年度の『防災キャンプ』

28年度の防災キャンプでは、「防災講演会」や「アルファ米を使った朝食づくり」、「図上防災訓練」などの活動に取り組みました。子どもたちを含めた本地域のみなさんの更なる防災意識の向上をめざして、これまでの活動とはまた違った新たな活動を取り入れました。

「防災講演会」では、高知大学の岡村眞先生が「観音寺地域で予想される南海トラフ地震津波と事前防災」をテーマにご講演をいただきました。熊本を中心とした地震や東日本大震災をもとに、地震発生メカニズムや津波被害、それに対する備えについて教えていただきました。「南海トラフ地震は、必ず起きる。」「一ノ谷地区は津波の心配はないが、一ノ谷池決壊の恐れはある。」「大地震の時は、まず家の中にある倒壊物から身を守ることが重要である。」などのお話により、参加者の多くのみなさんが改めて、大地震への危機意識をもったことと思います。

また、「図上防災訓練」では、地区ごとにグループを作り、地図上に小学校や自宅、公共施設、地震発生時に避難できる広い場所、食料などが確保できる場所をかき込んでいきました。続いて、火災発生時や地震発生時の危険箇所のほか、ため池や危険な川、用水路をかき込みました。その後、子どもたちは、家族や地域のみなさんと一緒に、避難場所への安全な避難経路を地図上にかき込む作業を行いました。

この訓練を通して、みんなで大きな地図を囲み、日頃は気付かなかった地域の防災上の課題を見つけることができました。そして、災害時の対策を考えたり、防災意識を向上させたりすることにつながったと思います。



〈防災講演会〉



〈図上防災訓練〉

29年度・30年度には、一ノ谷防災キャンプ実行委員会をはじめ、地域のボランティアのみなさんや中学生ボランティアのご支援、ご協力をいただきながら防災キャンプが開催されました。1日目には「防災講演会」、そして2日目には「地域防災訓練」が実施されました。29年度には、新たに、三観広域消防本部に配備された「はしご車」による救出訓練も実施されました。

「はしご車」による救出訓練は、一ノ谷池や財田川の堤防決壊による洪水を想定し、屋上に避難した家族全員がはしご車による救出訓練を体験することができました。

また、「防災講演会」は、29年度には香川大学の高橋真里先生らによる「身近なもので防災工作教室」をテーマにしてのご講演。新聞紙スリッパや帽子、キッチンペーパーマスク、ビニール袋カップ、ペットボトル雨量計、段ボールベッド作りを体験しました。参加した子どもたちは、避難所で役立つものや情報を得るためのものが、身近なものを使って簡単に作れることに驚いていました。

続く30年度には、高知大学名誉教授の岡村眞先生が「近づく南海トラフ地震に備える～地震を災害にするのは人、事前防災と地域の協働で命をつなぐ～」をテーマにしたご講演。

大災害の時には、地域の「自主防災組織」の活動がますます重要な役割を担うことや、大規模地震に備えてやっておくべきことなどについて分かりやすくお話いただきました。あわせて、一ノ谷周辺の標高図や香川県の震度分布、海底地形図などの資料を活用した、一ノ谷地域の「実情」に応じた具体的なアドバイスに、参加されたみなさんは真剣な表情で聞き入っていました。

「地域防災訓練」は、丸亀市・川西自主防災会のみなさんを迎え、地域から約150名が参加して行われました。5班に分かれ、ローテーションしながら、「ロープワーク訓練」や「倒壊家屋からの救出訓練」、「家具転倒防止」、「応急措置訓練」、「起震車体験」を行いました。そして、最後に実施した「バケツリレー」では、参加者全員が一列に並び、プールの水を汲んだバケツを手渡ししながら、水を体育館近くに置いた容器に溜めていきました。参加した多くの人が、見た目以上の大変な作業であることを実感したようです。



〈はしご車による救出訓練〉



〈応急措置訓練〉

### (3) 令和元年度の『防災キャンプ』

今年度の防災キャンプは、猛暑の時期を避け、初めて10月に行われました。そして、これまで、2日間にわたっての防災キャンプでしたが、今年度は1日での開催となりました。今年度は、『家庭でできる減災・家族で話し合う減災』のテーマのもと、「基調講演」と「分科会」が行われました。そして、新たな試みとして、地域のみなさんより「我が家の防災新聞」を募集する取組が加わりました。

まず、基調講演では、アウトドア流防災ガイドの「あんどう りす」さんを講師に迎え、「楽しいアウトドア防災術～『やらなければ』が『やってみたい』に変わる！～」の演題でのご講演がありました。お話の中で、特に印象に残ったことをご紹介します。

- ・ふだんの生活の中に防災グッズや防災の知恵を取り入れることで、無理なく有事に備えることができる。
- ・水が膝くらいまできたら人は流される。速さが2倍になったら、水の力は4倍になる。
- ・車の運転中、豪雨などにより、車のタイヤの3分の1程までの水が道路に溢れているときは引き返すこと。車の中には普段から脱出ツール（金槌、カッターなど）を入れておく。
- ・木にのぼるときなど、手をあげるコツは横からまわして上げる。（縦に上げるより、横からまわして上げた方が高く上げられる。）
- ・長靴などを買うなら防災にも役立つ物を買っておく。

続いて、2つの分科会が行われました。

分科会①の講師は「高橋 真里」さん（香川大学 IECMS 地域強靱化研究センター）。テーマは、「クロスロード体験～YES, NO・・・自分ならどう動く？～」。自分が大災害に見舞われた場面での決断の分かれ道を描いたゲームに参加しました。提示された問題に対して、YESかNOのどちらを選択するか考え、回答しました。その後、周りの人とお互いの決断を熱心に伝え合う姿が見られました。参加者は、災害対応に対する考え方の多様性を感じることができました。

分科会②の講師は、「あんどろりす」さん。テーマは、「親子で楽しく防災～LEDランタン作りと古武術技～」。準備された材料を使って、親子で楽しくLEDランタン作りに取り組む姿が多く見られました。世界にひとつだけのランタンが出来上がりました、有事の際には、きっと重宝することでしょう。

また、被災している方（大人）を抱き起こすことを想定し、それがなかなか難しい場合にも、古武術の技を使えば楽に抱き起こすことができることを実際に体験し、参加者からは、驚きの声が聞かれました。



〈分科会①クロスロード体験〉



〈分科会②親子で楽しくLEDランタン作り〉

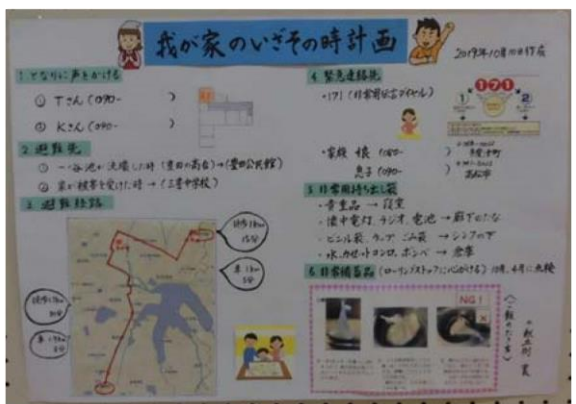
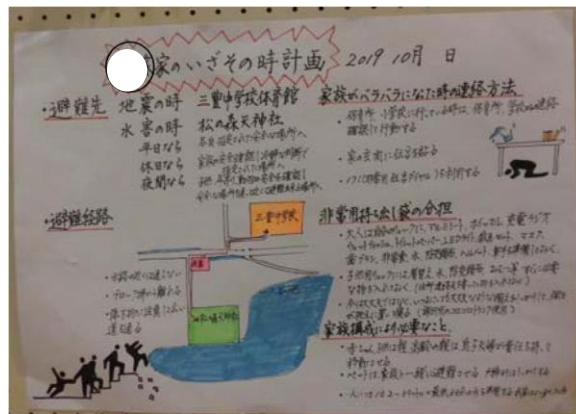
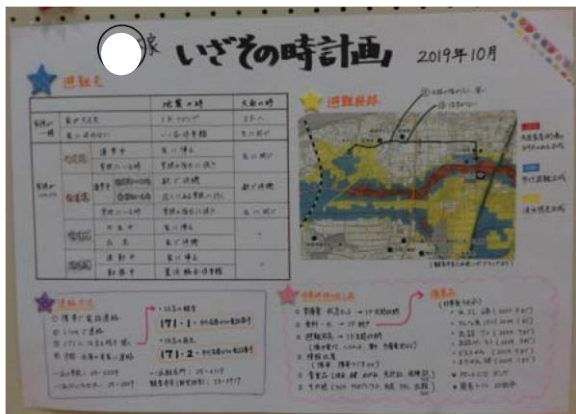
そして、新たな取組である「我が家の防災新聞作り」。防災キャンプ当日までに、28の応募作品が寄せられました。どの作品からも、危機意識をもって家族としっかり話し合った様子が伝わってきました。防災キャンプの前日、実行委員が審査を行い、「最優秀賞」「防災キャンプ実行委員長賞」「優秀賞」「敢闘賞」の作品を選出しました。その表彰は、当日、開会式の中で行われました。

受賞されたご家族（親子を含む）の感想をご紹介します。

「家族がいない時にどんな行動をするか話し合った。実際に何日か歩いて確認した。」  
「地震が起きたときにどう避難するか、家族で話し合うよい機会になってよかった。」  
「もしもの時にひと目で分かるように、色合いなどインパクトのある作品にした。」  
「川沿いに住んでいるので危機感をもっていたが、今回はじめて家族で話し合った。新聞を作った時の気持ちを忘れずに、これからも話し合っていきたい。」  
「現地に行って写真を撮ってきた。もしもの時は、3つの方法で連絡をとることを話し合った。」  
「地震と水害の場合、また家族がバラバラの時など、それぞれに対応がちがってきて難しいと感じた。」  
「遠い所に住んでいる家族より、頼りになるのは隣の家の人。どこで寝ているかなど話し合った。この機会に話ができ本当によかった。」



「我が家の防災新聞」(受賞作品より)



3 おわりに

地域のみなさんの防災意識の向上をめざして実施されている「一ノ谷防災キャンプ」。年度によって、少しずつ活動内容は変わってきておりますが、南海トラフ地震や水害などの自然災害に対する心構えや行動の具体について体験的に学習することができています。子どもたちも、家族や地域のみなさんと一緒に活動することを通して、防災・減災への意識の向上が図られていると思います。

実際に大きな災害が起きた時には、自分で考えて命を守るための行動をしたり、地域のみなさんと協力したり助け合ったりすることが大切になってきます。そういう意味で、この防災キャンプは、万が一の場合に備えて、たいへん学びの多い有意義な活動になっていると感じています。

今後も、『防災キャンプ』を通して地域とつながり、子どもたちの防災意識をさらに高めてまいります。

# 事務局だより

令和元年 12月

今月の事務局だよりは、かがわ自主ぼうの近況をお知らせします。

## シェイクアウトプラスワン訓練フル稼働

今月（11月）はシェイクアウトプラスワン訓練にフル稼働。

関係者全員のガンバリで計画通りに訓練は終了することが出来ました。この会報をお借りして、皆様にお礼申し上げます。

活動を通じて印象深い点や気がついた点などについて以下にご紹介申し上げます。

- （1）夜間災害発生 of 想定。宿直要員が少ないことから、施設利用者のお元気な人が車イスを押したり、歩行困難な人を介助しながらの避難行動、私供が支援を差し上げようとする、最後まで頑張ってみますので見守るだけで結構ですと言われました。（自助努力を尊重しました）



施設職員への訓練状況



海拔 7m の一時避難所へ到着

- （2）施設の中で 4～5 人単位でグループ分けしており、グループ単位でまとまって避難行動を素早くできるように、体制作りを着実に進めておりました。3 年前とは見違えるほどの進歩です。  
平素の取組みに拍手です。

- (3) 備蓄への取組みも拝見させていただきました。  
食料品のほとんどが非常食でまとめていましたが、熊本地震後、非常食の取り過ぎが体調を崩すことが課題になっており、施設内で議論を行ない、見直ししてほしいと思います。
- (4) 更にたきだし機材が十分に整備されていない様子です  
(3) 項と連動しているのではないかと考えられます。  
非常食ばかりだと、100~200人食を作る大鍋や羽釜が無くても何とかかなるといふ安易感の表われではないかと拝察されます。



一般路での避難状況



2Fフロアーへの避難（車イス利用者）

- (5) 全般的には、取組みの進化が表われており、プラスワン訓練の効果が発揮されているものでないかと思っています。  
10日間程連続での訓練、目の回りにクマを作ったの取組み、3~4日経過したとき、体にもうれつな疲れがおそってきましたが、訓練で出合った施設利用者の笑顔とお礼の言葉でいやされている毎日です。

## 編集後記

12月の防災・減災の輪は、観音寺市立一ノ谷小学校校長横山様の原稿を掲載させていただきました。ありがとうございました。